

血管造影

血管造影検査とは

血管造影検査とは、血管にX線を透さない造影剤を注入してX線撮影し、血管が狭くなったり詰まったりしていないか・腫瘍を栄養としている血管はどれかなど、血管が関係している疾患を詳しく調べることができます。アンギオグラフィーとも呼ばれています。当院の血管造影システムでは、撮影条件や画像処理を見直すことにより画質を損なうことなく従来に比べ40%の線量低減をしております。

デジタルサブトラクション血管造影（DSA）という撮影方法を用いると、血管だけがよりくっきりと浮き上がって見え、鮮明な写真を得ることができます。動脈にカテーテルという細い管を挿入して、その先端を目的部位の近くまで進め、造影剤を注入しX線撮影します。カテーテルを挿入する場所は腿の付け根の鼠径部や、手首・肘関節付近の動脈を穿刺して注入する方法があります。最近ではこの血管造影検査法の手技が、治療にも用いられるようになっており、狭くなった血管を広げたり、腫瘍に栄養を運ぶ血管を詰めたりなどを行うことも可能です。

1）心疾患の検査（心臓カテーテル検査）

心臓の血管（冠動脈）が狭くなると、狭心症や心筋梗塞を起こす可能性があります。心臓カテーテル検査はこれらの疾患を発見し、血管の狭くなった部分に風船のついたカテーテルを通して内側から押し広げたり、網目状のステントを留置し治療を行います。

2）脳疾患の検査（頭部血管造影検査）

くも膜下出血・脳梗塞・脳動静脈奇形など脳血管障害の状態を把握し、治療方針の決定に利用するほか、手術前の精査としても実施されます。最近では、脳動脈瘤に対するコイル塞栓術や脳梗塞に対する血栓除去術、頸動脈狭窄症に対する頸部ステント留置術（CAS）なども行っております。

